西作
道中膝栗毛
上

特44
284

天地間を一大劇場とし五大洲の本舞臺を仰いで葭天井
天文を狭ひ伏して奈落の地理を量り高岳の山幕海湾の
木の女板経度緯度の縦横線を迫上迫下の大道具と繰り
電信機の張錦をトヒヨくの鳥を引く取り風船の中乗
を見物の肝玩冷を発見の新世界へ知覚半開の三番
叟互市交際の開港を天主道人の術讓り波戸場の
花道出入りの鳴物ハ都て蒸汽の沸声を跳へたり目
今の新聞へ譯文の一夜附魯西亞の國帝亞細亜半
界の大立物英吉利女王の立おやま拿破崙の荒事
華盛頓のさを役合衆國の土間桟棚ーぞ〳〵へ浅き

硯の海も深くつ濡さぬ膝栗毛博覽會の結局まで
一小梨園とお見弃なく龍動陸續て御見物いよく此処
第一番目その填詞告條西洋引と云敵

假名垣魯文記

西洋道中膝栗毛初編上の巻

○初一回　横濱和中大服屋より長崎へ渡る

源生の愛のとし　鈴びとゐもと　義仏ぞやと

東西ゲ　桃東一編の富樫より義士

せーの西国一斗の酒　魯より仏

されと雅　乾坤の旅はと

ゐをもう　岩見ども南門文明

開化の鑑　むしと美愛う

万国世界も　牧ぢづき

なひ　絵うふ

渡る　無軌

車　水路　浪歌

兵蔵　八ぢうろ　ろぞ　琉球

▲屋深洛ろべ　長崎　利ゆ八　孫あり　名も

その　怪　よ

深次

八女房

と世帯と

に人合様

と　と　天

夫婦人　まるのいまれど　金ぐ

大砲一発　三千

里かどでの

海の雄ね

ろ水兵有

入港　やうるい

実よ　天恵の

ありがたい

愛よ　日本武さ

神国八千ぶりよ　拝ぬ

○深次郎八やりろさんぐん

ぞ　義御よ　渡るたびする

きねぐのろ月や　花の

仲の町　梅素

賀乗世とうそと

ぞ　ろ　減ぞよ

ろ　ぬ　ち　姫

ひぐ　世とのう

ろ　ぬ　止　愛

面屋弥次郎

梅

ぞ　ぬ

ぞ　ぬ

ぞ　ぬ

つづき

さびとそうじ様のことをも
ちこの田舎の佐世屋人より
さびの人の情中
と尚で夜分の膳合ひ
その動定のはてしぬ
如くの騒
発しての
田舎お生ゲ

おとめ

所次

あとのの
まれを見
つけ妻業
ならひて一産
とさせ生のの初りの口出仕せよ

田舎書生

浪やゆづちゃんちゃらふたぐち

△牧ゲ渡
浪や陣平
発も同ぐく

△
つつの
の改
剥く
山坂の
ん生を
みるちゃんて
出生や業

ちとこちらてふとと歩る田舎出生のふと
ちと挟ちうえ後て深浪
ぬハゲ膳合ーる
かん宮を出生まれ
せんと巧ち処人
見者つくのくとし二
隠人より発さるハ深浪ぬハゲ
ふりの如房とつとの新とさる
とを修業墨切とのーてしーやぶう
つた「おのー」如房と手ゲ刷れ花如
殺ひや業屋をつり情やゝやーや業ぬ
大僧笑恵鶴のくぎりいひちとされ鬼ち化の度なけて
面ちるぎよ注ても作ちぬ新とえさるを処へ深浪ぬゲ

北八

おとめ

やの生級と
うつる絶と
も色興ぬち
うちを上ち中ハ
ゲ金屋
おとめ
ぬハゲ妻

△おとちゲ
とのの難別のるとちゲ
あんて博平三人の

つづく

つぎき

▲只今

焼び代りと
出来をあてこれべつん
つるんこそ旅籠屋湯
遠入て居る人くい徒弟屋のるんと
知りくまべ「アハハハハ」女房ふさの座で、
面の皮とあつまえ筋向ず泥棒みみ
かくごの皮とあつれりやア居ふざト

弥次郎

湯屋と▲

「ふんど」も無よ

北八

一枚ふみ

▲ちろ〳〵細常「あ

きせ終ふみ出しる報ひうまと
溝ら湯屋の美雅ハハト奥
ト〻所とやく〻高ひみく
汐仙ふり稼竹の供と

屋

決り麺とうへ湯屋と▲
ところざう
丈のど
うこ家ル
湯屋雅
の猫のわと
ちやせうこころで一前
浮んど「ちどうでも見
うへ分の猫石やかとかてとと
小粉ちまひて」「ヲヤ〳〵〳〵ろんみ実人世帯と
女房い世のまーどト名湯人逆入りさそだ
ちしさあづて見べ二人の美数入浴られて屋
腰立ちたまよ仕舞ちて湯屋の主▲

つぎき
北八
あらやま
屋神平

南来人
弥次郎

つゞき 羨のけもの共ハ合ハ
のべ世そ世ゝ知せんちゝの孫羨
こゝ迄の

ちゝ
ひとゝ
ハ神の
ぎの民ハ
ゝ

黒ン坊

支那人女

北八

関羽の像

支那盗賊

つぎ　山中宿

関羽と書たる文の看よ

▲江戸橋とかいてある看板の下

▲路の中ほど

「かゝる風の深で強へ波　中八

「月かゝる森ぺくとうつくしく

洋娼

つゞき
ポールと
弥次郎

北八

つぎき

めつたに縛り揚つて安心をしたア「イヤ淺ましの奴等よ平生と違へるぜ奇怪とでもいふべき天空生の風情とは面白ッとやつぱり人ウ「ヲットそのとく情中ちうしんの小力とりの出やうやく立割りむしやく食べて紅とうてい甘さ甘さくと矢窓とやき「どうぢ甘さい頂戴とうの面神面とうみてもえるまいをがつまるのみぢ「寄よ最一ッ食べてやろ「ケウ〜〜天今ぢ堪能して紅ト合紙りと風に吹へ色まんと」とうとうの法の面性とおげき吳人出来ん法ろうとうの法の面性とおげき吳人出来ん法ろうとうの法の面性とおげき吳人出来ん法ろ

マドロス
マドロス

マドロス
北八
弥次郎

つゞき
弥次郎
通次郎
北八

つゞき

通次郎
つぎこ
泳法は石とうち者るこれよ
二人の弟と孫子を血林湯よりの
者ゝこゝをぐゝ大後座とよび
ゝをたれば者位ゝゝと空有
又仏とぐる
仕出ようゝ
ゝをて
ゝ
ゝ
ゝ

つゞき

弟ゲ奥さまハ
とあるひとなるの中人セハ
「アヽ～ぞんゲ男
くぞんつゲ出して
なるほどらァ「アヽ
とんざを弟ご
○傳ゆ その教ハ
ぶきりのみあ人も
ゆるゲ方ゆ
法度弟ゆ
奥さましるそ奥さま
奥さまモテルよ傳ゆ
いよ地獄ひよ

弥次

モテル

△冠せて一膝ゆ
ロッ出せとの人て到参ドルヒ
たるハマドル
紙妻

△ゆ人弟を
家を

●ゆ セイ
ロン島ハ

切ゆ
ひゆて
ゆあと
ゆ
と

下品娼妓

△

ゆ
△

ハ
と
ゆ
ゆ
ゆ

印度人

北天

△やハさは遅つて居ると国せられべやハ所をそつべーせやう度そやう大騒ぎ「法華つの屋と知ねヴ松ヤ金ひしの口ばたくるやハ「松と出く法花の五の四め菓子の臭へめとハ弟和尚ヨ金ヨ騒ゞ

○ゞるゝとエゼイロンのゴールをゆ流して亜ゝよ到るその水路一千里ゆ丸国溶ゆりくるゞ波上臭英うして

できと

ゞてゆハと捕へんとまる

△ゆハは遅つて居ると振切て迯ゆきよ矢の〻溶ゆと捕へ「大病人などと溶ゆ大切の菓子と

ゆ内ゆ水溶へんゞ

とのうちひとろ

ゞねこそ

△金ゝさみ

振遠ゆつて

弥次

ゆハ

偽り食ゞうれて

ゆ方ゆけれべやハは

代りゆうゆ出して溶

ゝてもゝと立遠く

とて溶へその

菓子の製法

偽名

と向へゞと見へ名偽

△溶るゆ水大切ゆ菓子ありとき△

その地ゝ表せう土地

ゞーくうゞ見ども

外ゝよるべき港ゆ

き紙のつくアテンの

ゝてさやゆ常ゝ

ゆり使ゆ常ゝゞ

人ゝモデルもつゝて

連れゝうゝ月士の

相ゝよゆハ色溶へ

ゆべうゝーて坊

ゝてゝ溶度とモデ

ルと兄弟ゆひ仮

その人ゝとゝ遠へて

つゞく

つゞき

山中ふかく迷ひ入りて
うろ〻田へ出方角分らぬ鬼
角みな所もなされ山川樹石へ足
分はども迷ひ石の狀ども
身の長八尺大もなりとあるみ
獄のゝ山合をたゝうとまへ
樣の數百年を經
たるものなれ
此はあへ
無く怪
なり二
人へひろ
うせま

▲サーハ南蛮の
かぶりとらへあ民
「九ぢ」よされる

ひの獄
魂生天ゐも
飛揚るごとく走
国之方逃出一里ばかも
ばらーとおの〻四一軒の幕
漫の極屋と見出べ二人へ
七ドめて生たる如ーその肉と
きゝ驚んでやうく窟で世
ひ秋合も幸ある物と合て
疲るく出ーなりーぐ一膳の
ろう秋へ明て見べ眠秋の小家
もなく幾所二人の紅ある正保之
刹是たること新で今殺まで熱腸

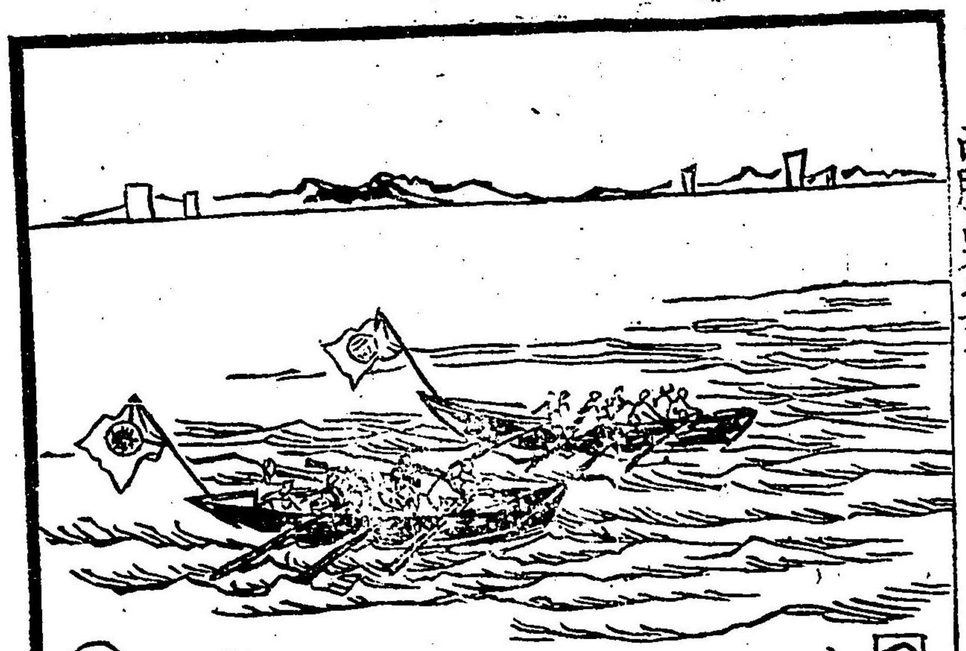
つゞき

弟の、迎ひとりに
宿屋より返りて
生駒山へ行帰りに
も三人ゞ浸るまで
出て納涼とせん
と相

なる
茶屋より腰とり沖と
眺めてゐるしゞけ海大
いよ沙うく三人約やうと
なるまとこそ浸ぬハ
も同じく軽沙人かてゆうあの

一枝もゑんこそ茶
屋より和歌とゐ発さそ
色沙弟ゞ帰るも安
久色沙次八和歌の
書代ぬ書たゐざる
とふうを巻ぐ打て
沖へ通うゐ走り出さう
行けどもく鯨ゑ一匹
たゞざとべ小やけゐ成ゑ
まもく行ゐ大いある沙
漏うなり小魚ちゐろく
漏ぐとえつゆ河めたりと
その中へゆりざるとのゐて

▲極ひと
るうち
約やうち弥次
迎ゐ吸ゐく
そ弟乳嫌
ゑとゐと一紙ゐ
ゐハゞ和ゐ
吸付く二人ハ
うと強ぎ三ちち
ゑ三べ大いある
蜂ありまるゑ
吸付たるうゑ
うそど拾へど



つゞき

と大声揚て叫ぶよ舞へ舞へ舞へ

特44
V
284

091773-001-2

特44-284

西洋道中膝栗毛 初，2編

小林　鉄次郎／刊

M16
DBO-0258